
日の本のお殿様

ミスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日の本のお殿様

【Nコード】

N5665X

【作者名】

ミスター

【あらすじ】

様々な歴史上の偉人の逸話を面白くして紹介していきます。

勿論、史実です。

1話が短めで、毎回物語は繋がっていませんので、好きな偉人だけ読んでいただいても構いません！

ゆる〜くやっています。

後書きで真面目に（？）解説します。

一番槍 東北の独眼竜（前書き）

さあ始まりました「日の本のお殿様」！

記念すべき第一回目は伊達政宗です！

勿論、物語の内容は史実です。

一番槍 東北の独眼竜

「んゝ。この茶器は何て素晴らしいのだろう…。色、艶、形、そして重さ。何を取っても非の打ち所がない！素晴らし過ぎる！」

こちらの殿様は伊達政宗。

独眼で有名。

今も根強い人気有り！

彼は茶器がとても気に入っている様子。

「素晴らしい！もっとよくこの茶器の姿を見てみようじゃないか！
ってうわっ!？」

うっかり手を滑らせてしまった。

しかし、持ち前の反射神経を駆使して見事キャッチ。

事なきを得た。

「ふゝ…。危ない…。私としたことが焦ってしまった…。
…。」

様子がおかしい政宗。

「というか…。茶器のぶんざいで私を焦らせやがって！ふざけるな！
貴様などこうしてやる!！」

バギーン！

政宗は5秒前まで素晴らしいと評価していた茶器を叩き割った…。

一番槍 東北の独眼竜（後書き）

伊達政宗は、素晴らしいと評価した茶器を、「自分を焦らせた」として叩き割った。

勿論自分が手を滑らせただけ。

茶器は悪くない！

凄まじいお殿様ですね…。

こんな感じで史実をちよつとした物語として紹介していきたいと思っています。

二番槍 歴史を変えた謀反人（前書き）

今回は明智光秀です。

一応小説なので、登場人物に「キャラ」を付けてみました。

あとがきで、史実について真面目に（？）書いていきます。

二番槍 歴史を変えた謀反人

「みんな集まった？今日は楽しい連歌会だ！」

ここは京の愛宕山^{あたご}。

明智光秀主催の連歌会が催されています。

「んじゃ、最初は俺ね！主催者だから！」

光秀は、連歌の第一句を読んだ。

「ときは今 あめが下知る 五月^{さつき}かな」

見事な一句。

今日は5月30日。

今は雨が降っている5月である。

見事。

それに続けと家臣も歌を読んだ。

さて、翌日。

「おみくじ引くぞー！」

張り切る光秀。

「何が出るかな？何が出るかな？っと…」

凶。

「ま、こんなこともあるよね！もう一回！」

家臣は「金魚すくいかつ！」と突っ込みたくなりながらも光秀を見ていた。

光秀はもう一度おみくじを引いた。

「何が出るかな？何が出るかな？よっ…！」

凶。

「…。ままま！稀によくある！もう一度だ！」

家臣も呆れ気味。

ここまで運が悪いやつも見たことない。

光秀はもう一度おみくじを引いた。

「…何が出るかな？…そらっ！」

凶。

家臣が地味に期待していた奇跡をやったのけた。

「…。もう知らない！うわー！」

走ってどっか行ってしまった。

と、思ったら戻ってきた。

涙目で…。

「あのさ、君…。本能寺の堀ってどのくらい深いの？」

光秀が家臣に尋ねた。

「知りませんよ」

サラッと答えた家臣。

「そう…。うわー！」

またどっかに行ってしまった。

因みに、光秀が連歌会を開いたのは本能寺で「アレ」が起きる3日前のことでした。

二番槍 歴史を変えた謀反人（後書き）

本能寺の変の3日前、明智光秀は連歌会を開きました。

会場は京都の愛宕山だったそうです。

連歌ってというのは前の人が読んだ俳句に、次の人が俳句を続けるものです。

その一番最初を任されたのが光秀でした。

光秀は「ときは今 あめが下知る 五月かな」と読んだそうです。

実はこれ、本能寺の変の決意表明だとも取れるんです。

明智家の先祖は「土岐^{とき}」という家でした。

それが、「あめが下知る」。

つまり、「天下に命令する」ことだと言われています。

「五月かな」は謎…。

私は知りません。

本能寺の変が6月2日。

連歌会がその3日前なので、ちょうど5月だったからでしょうか？

光秀は、愛宕山でおみくじを3回引いて、全て「凶」だったらしい

です。

逆にミラクル！

さらに、「本能寺の堀はどのくらい深いのだろう…」と呟いたとする資料もあるんです。

因みに、愛宕山で読まれた連歌を収めた資料も現存します。

小説では、泣いてどっか行っちゃいましたが、そんなことはしていません（笑）

伊達と大友以外はそのままで面白い逸話が無くて…。

逆に言うとその2人は話題がつきません。
近々、紹介させていただきます。

三番槍 一番槍の出世頭(前書き)

今回は賤ヶ岳の七本槍のあのお殿様です。

三番槍 一番槍の出世頭

「俺は誰にも背中を見せたことが無い！背中を見せるなど武士の恥！」

そう豪語するのは福島正則。

賤ヶ岳の戦いを始め、数多くの戦で一番槍を担当した勇猛な武将。

一番槍は戦が始まってから真っ先に敵に攻撃すること。

勇気がいる仕事なので高い評価が貰える。

今、そんな福島正則が友人の前でひたすら語っている。

「俺は背中を見せない！この前なんか、戦から撤退するときわざわざ敵の方に体を向けて、背中見せないようにしたんだぜ！」

正則にとって、背中を見せないことは相当な自慢になることらしい。

しかし…。

「うふふ…もう、正則様…」

「よいではないか！よいではないか！」

福島正則、浮気。

この時は、正則も夢心地だったのだろう。

しかしそれも長くは続かなかった。

浮気後、帰宅した正則を待っていたのは…。

「昌泉院……。あの…それは…?」

昌泉院は正則の奥さん。

ずっと帰りを待っていたらしい。

薙刀を持って…。

「あんた…。浮気してたんだって!? ぶっ殺してやる! 覚悟!」

「うわー! 待て…! 昌泉院…これには訳が…」

「浮気に訳などありません! そりゃあ!」

昌泉院は薙刀を振り回した。

「…う、うわー!」

この時初めて相手に背中を見せて逃げ出した正則だった。

「俺さ…。この前、初めて背中見せたわ…。女って…怖いものだな
…。はあ…」

三番槍 一番槍の出世頭（後書き）

福島正則は、「敵に背中は見せない」と友人たちに豪語していたらしいです。

戦から撤退するときですら、わざわざ体を後ろ向きにするほどでした。

そんな彼が浮気して家に帰った時の出来事。

玄関を開けると、そこに立っていたのは正則の奥さんである昌泉院。

しかも、手には薙刀。

夫の浮気にブチギレして、正則に切りかかったらしいです。

この時に初めて正則は背中を見せて逃げ出したのでした。

後に、正則は友人に、「この前初めて背中を見せて逃げた。いや、おなご女子とは恐ろしいものじゃのう…」と語ったらしいです。

勇猛な武将も、奥さんには勝てませんでした。

結論！

浮気はダメです！

そんなわけで、今回は福島正則のだらしない（？）一面を紹介させて頂きました！

四番槍 東北の独眼竜2 (前書き)

今回は奥州筆頭のあの人パート2です。

ひえゝゝ

怖ろしやゝゝ。

四番槍 東北の独眼竜2

ここは奥州。

今日は楽しい能の見学会！

当然のことながら、奥州のあのお殿様もご出席。

能と言えば日本の伝統芸能！

観阿弥・世阿弥が完成させたアレ！

「それでは、始めさせて頂きます」

そう言って、能は始まった。

その能に見入った奥州の独眼竜、伊達政宗。

無事に、能は終わった。

「いやー！実に素晴らしかった！こんなに素晴らしい能は初めてじゃ！」

興奮気味に語る政宗。

「誠に素晴らしかった！是非もう一度やってはくれぬか！？」

政宗は俳優（能を演じた人）に頼んだ。

「いえ、能は一度しか出来ません」

「…死にたい？」

政宗は刀に手をかけた。

「…。やらせて頂きます」

俳優は、二度目の能を演じた。

四番槍 東北の独眼竜2（後書き）

伊達政宗は、能を見た後に「素晴らしかったのもう一度見たい」と頼んだ。

すると、「一度だけしかできない」と断られた。

すると、「死にたい？」と能の演じ手に尋ねたらしいです。

能の演じ手はもう一度やって見せたらしいですが…。

恐ろしい男です…。

能の二回目断ったくらいで殺されちゃ命がいくつあっても足りませんわ…。

五番槍 口を滑らせた猿と賢い狸（前書き）

今回はあの2人！

お酒の席には気をつけましょう。

五番槍 口を滑らせた猿と賢い狸

今日は天下のお殿様、豊臣秀吉主催の宴会！

その席に、秀吉の家来の徳川家康も出席した。

「あっはっは〜！い、家康殿〜…」

既に大分酔いが回っている様子の秀吉。

「何でしょう殿下〜！」

家康もご機嫌。

2人の会話の話題は秀吉自慢の大坂城へ。

「殿下は大変素晴らしい天下無敵のお城を持っていらっしゃる！なんて羨ましいことでしょう！」

家康が言った。

事実、堀の深さ、縄張りの大きさ、天守閣の派手さ、守りの硬さのどれをとっても天下一だった。

「いやいや家康殿！あんな城、堀を埋めてしまえば只の裸城。攻略も簡単になってしまうから、最強ではないのだよ〜」

秀吉が上機嫌で言った。

「ははは！何を仰いますか！殿下は冗談がお上手で…」

それから数年後。

大坂冬の陣で家康が和睦の条件として持ち出したのは、城の堀を埋めることだった。

そして、夏の陣で豊臣は滅んだ。

五番槍 口を滑らせた猿と賢い狸（後書き）

秀吉は「大坂城は堀を埋めれば簡単に落とせる！」と家康に言ったそうです。

そして家康はそれを実行しました。

実際は、堀を埋めるだけでなく、城の壁壊したりもしたらしいです。

去年秀頼と淀が最期を遂げた蔵の一部が発見されました。

実際にあそこで戦いが…。

と思うとドキドキゾクゾクします。

秀吉時代の大坂城見たいな…。

因みに、小説内では「大阪」ではなく「大坂」をに使わせて頂きました。

誤字じゃありません。

次回も秀吉を予定しています！

六番槍 日本二の出世人（前書き）

今回はあの天下人のあのホトトギス殺す人との出会いです。

諸説あるうちの一つを紹介します。

六番槍 日本一の出世人

ここは駿河は今川領土。

各地を放浪した後、今川家の家臣の松下之綱まつしたゆきつなに仕えた男がいた。

木下藤吉郎。

後の豊臣秀吉である。

「ちっ…！何だよあいつ！浪人だったくせしていい気になりやがってよ！」

藤吉郎が優れた人間だったため、周りの之綱の家臣は秀吉が嫌いだ
った。

「之綱様！藤吉郎のやつ、調子乗ってると思いませんか？」

家臣の一人が之綱に言った。

「ああ。そうだな。当然今回も出世は…」

「あいつに出世は勿体無いです！」

才能が有りすぎたために、出世コースから外された藤吉郎だった。

そんなある日…。

「おい藤吉郎！尾張まで甲冑買いに行け！」

之綱から藤吉郎に命令が出た。

藤吉郎は逆らわず、尾張まで行った。

「俺はこのまま之綱のもとにいるべきなのか？それとも、尾張には信長とか言うすげー奴もいるって噂だ。いつそのこと…」

考える藤吉郎。

答えはすぐに出た。

「…甲冑代で服を買いおう！そして信長に会おう！甲冑代はそのうち返せば問題ない！俺出世してーよ！」

藤吉郎は、甲冑代をくすめた。

「そちが藤吉郎か？」

藤吉郎、只今信長と面会中。

「は、はい！藤吉郎です！」

「ほう…。猿みたいで可愛いな…。採用！」

「ありがとうございます！」

こうして、藤吉郎の新しい道が開け、閉ざされた出世コースも再び開けた。

「くそっ！藤吉郎帰ってこねー！俺の甲冑はどうなるんだよ！」

何も知らない之綱だった。

六番槍 日本一の出世人（後書き）

今回は解説するところが無いくらい史実だったりします…。

之綱の家臣から嫌われて出世コースから外された秀吉は、甲冑を買いに行くついで（？）に、信長に仕えます。

出世したかったんでしょーねー。

結果大当たりでしたけど。

因みに、甲冑代は返すつもりでいたらしいですよ。

信長が猿顔を気に入ったのも事実です。

ついでに言いますと、今回の出展は「太閤記」です。

そもそも、秀吉が今川家に仕えてたって知ってましたか？

あくまで、諸説あるうちの「太閤記」での話ですけどね。

七番槍 男たちの熱い友情（前書き）

史実過ぎるとつまらないことが判明しました…。

前回のは失敗です…。

今回ののはそれを踏まえて無理やり軌道修正しました…。

出来てない気もするけど…。

今回は有名なあの逸話です！

七番槍 男たちの熱い友情

今日は秀吉主催のお茶会が開催されている。

様々な有力大名たちが秀吉に呼ばれて集まっている。

その中には、大谷吉継の姿もあった。

吉継は、若いころかららい病（ハンセン病）を患っていた。

そのため、大名たちは吉継を気味悪がった。

「さて、ではお茶会を始めようじゃないか！」

秀吉が言った。

秀吉は、自らが立てたお茶を一口飲み、吉継に渡した。

「大谷殿、どうぞ」

「はい。頂きます」

吉継は秀吉から茶受け取った。

そして、口に近づけたその時…。

ポチャン…！

吉継の顔から、茶器の中に膿が落ちてしまった。

気まずい雰囲気が出る。

「あ…。えっと…。はいっ！」

形式通りに、吉継は隣にいた小西行長に茶器を手渡した。

それを手渡された行長はドン引きした。

「え…。ちよつと…。嫌なんだけど…。えゝ…」

困る行長。

「仕方ない！飲んだ振り飲んだ振り…」

口を付けた振りをして次の人に渡した。

「ちよつ！これ飲めと…。？私も飲んだ振りで…」

「俺も飲んだ振り作戦で…」

その様子を見ていた石田三成。

「よこせっ！」

茶器を奪い取ると、そのまま一気に飲み干した。

「ふあゝ！喉が渴いていたので我慢できなかったんだ！美味しい！もう一杯頂きたく思います」

「三成…、三成いー！」

吉継は泣いて感謝した。

それ以降、三成の為に命を懸けて尽力した吉継だった。

七番槍 男たちの熱い友情（後書き）

吉継と三成の友情物語でした。

因みに、茶器に落ちたのは膿とか鼻水とかいろいろ説があります。

あるいは、ただ口を付けただけでも言われています。

いずれにせよ、他の大名たちはらい病の感染を恐れて口を付けなかったらしいです。

そんな中、三成だけは飲み干したものですから、吉継は心から感謝したんでしょう。

因みに、良い話をぶっ壊すことになりましたが…。

三成ではなく、秀吉が気を利かせて飲んだとも言われてたり…。

つまりどっちだか分からない。

なんだかなー…。

でも、三成か秀吉のどちらかが吉継の恩人だったことは事実です！

八番槍 尾張のうつけ革命児（前書き）

今回はあの超有名人！

悲しいお話です…。

八番槍 尾張のうつけ革命児

「行くぞ野郎共！今日は西側を攻めるぜ！」

「おうよ！任せときな！信長！」

ここは尾張の国。

今日も数多の若い不良どもがこの国を駆け回っていた。

この集団を率いていたのは織田信長。

一応、次に尾張を引き継ぐ人間である。

しかし、人は信長を「うつけ」と呼ぶ。

その行動、服装全てが奇抜。

なので、若い不良どもからは人気があった。

現在の尾張は敵だらけ。

そこら中を駆け回るのは自殺行為だった。

「あの…。若殿様…。どうか、その身勝手な行動、慎んで下さいよ
…」

苦言をいうのは信長の教育を担当している平手政秀。

「うるさいな…。どうしようと俺の勝手だろう！」

信長が言い返した。

「しかし…。若殿様は次の織田家当主…。身勝手な行動は…」

「いいんだ！俺の好きな用にやらせてくれ！」

信長は、今日も遊びに行ってしまった。

こうなったら…。

政秀は、机に向かって、誰に宛てるでもなく手紙を書いた。

『若殿様の言動が治らないため、教える甲斐がありません…。もう…生きていても仕方がありません…。』

これが、政秀の遺書だった。

書き終えた政秀は静かに腹を切った。

「おい…。嘘だろ！？政秀！政秀え！返事しろよ！おい…。政秀！」

信長は、政秀の死をとて悲しんだ。

そして、政秀寺せいしゅうじを建て、政秀を弔った。

八番槍 尾張のうつけ革命児（後書き）

はあ…。

書いてて泣きそうになってしまった…（え？）

さて、実はですね、政秀さんが切腹した理由は諸説ありまして、今回はその一つを紹介させて頂きました。

でも、信長が政秀の死を悲しんだことは疑いのような事実です。

信長がうつけとして振る舞っていたのは理由がありまして、「敵を油断させるため」や「敵と味方の区別を付けるため」だったと言われています。

九番槍 戦国最強の甲斐の虎（前書き）

あらかじめ…。

見る人によっては不快に思う方もいるかもしれませんが…。

あの…。

事実…なんですよ？

本当に…。

私とて、こう…。

この小説に関しては、真面目に行こうと思ってたんですよ…。

まあ、あの…。

クレームは無しの方向で…。

九番槍 戦国最強の甲斐の虎

「ちょっと！これはどういうことですか！？」

「いや…その…あの…え〜と…だから…」

「誤魔化さないでください！」

「はい…」

ここは甲斐の国。

で、今二人の男が喧嘩中。

攻め寄ってる方が高坂昌信。

攻められてる方が甲斐の主であり、後に戦国最強とも言われる軍を率いる武田信玄その人である。

「いや…その…。お前が一番だよ！だから、ね！怒らないでよ…」

「ふん！よくそんなことが言えたものですね！私はもう知りません！」

「そんな〜…」

昌信は、怒ってどこかへ行ってしまった。

そもそもこの喧嘩、信玄が悪いのである。

信玄が、浮氣をしたのが原因だった。

相手の名は弥七郎^{やしちろう}。

一応言っておくが「男」である。

その浮氣に、昌信はキレた。

何故なら、昌信も信玄の「お相手」だったからである。

分かりやすく言うと、前代未聞の「男だけの恋の三角関係」が成立したのだ。

弥七郎に嫉妬して、昌信は信玄に攻め寄っていたのだ。

その晩、信玄は昌信に手紙を書いた。

『お前が一番だよ。冷たくされると悲しいよ！今まで、弥七郎に夜の相手をさせたことは一度も無いんだ！信じてくれ！』

因みに、信玄がこの手紙を書いたのは戦の最中だった。

九番槍 戦国最強の甲斐の虎（後書き）

…。

ごめんなさい！

でも、事実なんです！

その証拠に、あの手紙現存するんですよ！

手紙に書かれていた内容を少し上げてみます。

『一、弥七郎に言い寄ったことは確かにある。しかし、腹痛だと言われて断られた。嘘じゃない。』

一、弥七郎に夜伽（夜の相手のことです…）をさせたことは今までに一度もない。昼だろうと夜だろうとそんなことはないし、今夜もない。

一、お前とさらに仲良くなりたと思っているのに、疑われたのはたまらない。今まで書いたことに嘘があれば、浅間大社など神様方から神罰を受ける覚悟もある』

…。

あの人本当に戦国最強！？

戦場で家臣に浮気の謝罪文書いた武将ってどうでしょう…。

しかも何故現存する…？

因みに、高坂昌信と言えば、「甲陽軍鑑」の作者として知られています。

そして、最後に！

武田信玄ファンの皆様、変な一面だけ紹介してしまい、申し訳ありませんでした…。

あの…。

カッコいい武将だったんですよ？多分…。

十番槍 歴史を変えた謀反人2（前書き）

こんな小説もおかげ様で早くも十話！

読んで頂いた方に心より感謝します！

それと、途中から「ゝ番槍」って付けみました。
カウントし易くなってませんか…？

今回は明智光秀です。

若い頃のお話です。

十番槍 歴史を変えた謀反人2

ある日、友人と二人で某所に出掛けた織田信長の家臣、明智光秀。その帰り道での出来事。

「お？なんじゃこりゃ？」

光秀は馬を止め、地面に落ちていた木彫りの置物を拾い上げた。

光秀の少し前を走っていた友人が、光秀がいないのに気付き戻ってきた。

「光秀！どこ行ったかと思ったぜ。ん？何だそれ？」

光秀の友人は、光秀が手にした木彫りの置物を指差して聞いた。

「あゝ悪い。何か落ちてたんだ」

「拾い食いもいい加減にしないと腹壊すぜ」

「いや、今回は食い物じゃないし…。ほら！」

光秀は木彫りの置物を友人に手渡した。

友人は馬から降りて、それをよく見てみた。

「おお！これは大黒様じゃん！縁起がいいねえ！（今、『今回』っ

て言った？ 前は拾い食いをする？」

「大黒様？」

光秀が聞き返した。

「そうよ！ 千人の上に立つくらい神様なんだよ！ 縁起がいいから大事にしるよ！」

「ふん…。千人ねえ…。普通の人間にも千人位なら扱えるってのに…。千人じゃ軍として弱いし…。その程度の神様ならいらんわっ！ お前にやるよ！」

「ちよつ…。え…。（普通拾い物を人に渡す…？）」

友人は仕方無く受け取った。

十番槍 歴史を変えた謀反人2（後書き）

光秀が若い頃のお話でした。

光秀は、大黒様の像を拾いました。

それを友達に見せた所、「それは大黒様と言って、千人の上に立つ有り難い神様だ」と言われたらしいです。

すると光秀は、「千人なら並みの人間でも上に立てる。その程度の神様などいらん」と言って友達にあげたらしいです。

大黒様も光秀にとっては大したものではなかったんですね。

第十話は光秀でした。

因みに、サブタイトルは偉人ごとに決めていく予定です。ですから、「2、3…」などもあります。

またまだ頑張りますので、よろしくお願いします。

十一番槍 鳴くまで待った狸様（前書き）

今回はあの狸親父です。

ずる賢さが全面に出た逸話となっております。

十一番槍 鳴くまで待った狸様

「おー何だ？やるのか？俺は家康様の家臣だぞ？あゝ？たかだか一向宗のぶんざいでよおゝ？」

「んだとおゝ？テメエ、ただじゃおかねえぞ！」

「はっ！やれるもんならやってみやがれ！」

「やってやるよ！一揆だ！一揆だ！」

ここは三河の国。

家康の家臣と一向宗とのイザコザが起きた。

それをきっかけに、一向宗は家康が嫌いな連中と共に一揆を起こした。

「家康様！我らが有利にございます！あとは奴らが籠城する寺を落とせば我らが勝利！」

家臣が家康に報告した。

「よしっ！そうか！ならばもう大丈夫だな…」

少し安心した家康だったが…。

そこに、家臣がやってきた。

「報告！一向宗より和睦の申し出が！『寺は以前と同じようにする』というのが和睦の条件だと…」

「な…。不利なのは貴様らではないか！その様な条件、決して飲めん！」

家康が言うことはもつともだった。

暫くすると再び家臣がやってきた。

「報告！織田信長様より、早く戦を終わらせろとの主旨のお手紙が！」

それを聞いて困った家康。

「ぬう…。戦の勝利は目前…。しかし信長殿の命令とあっては逆らえん…。仕方ない！和睦じゃ！」

家康は、相手の有利な条件で和睦した。

しかし…。

「寺をぶっ壊せ！」

それが家康からの命令だった。

「なっ…。！何すんだ！寺を以前のようにするのが和睦の条件じゃな

いか！約束を破る気か！？」

一向宗から文句がでた。

「ほう…。以前…ねえ。寺が建つ以前は野原だったんだから、その通りにしたままでだよ！」

「くそっ…。狸めが…」

一向宗は悔しがった。

十一番槍 鳴くまで待った狸様（後書き）

家康の家臣がおこしたイザコザで、一揆が起きた。

（イザコザの詳細は知りません…）

一向宗＆家康嫌い組対徳川軍の戦いが始まった。

激戦の末に寺に追い詰められた一向宗。

そこで、和睦を求めた。

一向宗にとって寺は大切な場所だったのでしよう。

条件は「寺は以前のようにすること」だった。

つまり、寺には手を出すな、というこてだった。

家康は、信長から早く戦を終わらせろという指示を受けていたので、この条件を飲んだ。

しかし、戦が終わると家康は、寺を破壊した。

家康曰わく、「寺が建つ以前の野原に戻した」。

屁理屈でしょ！

家康は忍耐力だけでなく、ずる賢さもずば抜けていたのかも知れませんがね。

そうでもないとな下は取れないのかな…？

というわけで、家康の屁理屈な逸話でした。

十二番槍 江戸城の築城主（前書き）

シモンチェリ選手のご冥福をお祈りします。

あつちでも、加藤大治郎選手と共に、走り続けて下さい！

さて、今回は江戸城を築いたあのお殿様！

家康じゃないです。

家康は改築しただけですよ？

全国的な知名度は低いかもしれませんが、埼玉県内なら…戦国ファンの方は知ってるかもです！

十二番槍 江戸城の築城主

ここは武蔵の国。

一人の幼き天才がいた。

名は太田道灌。
おたとうかん

禅寺や足利学校で勉強していた道灌は、読み書きがとても良くできたのである。

「道灌……。お前、大丈夫か？」

そう声をかけたのは道灌の父、道真。
どうしん

道灌が早熟なのを心配していた。

「いいから道灌！昔から頭のいい人間にはろくなのがいないんだ！人は正直じゃなきゃいけないんだぞ？わかるか？道灌よ！障子を見ろ！真っ直ぐだから立つんだ！曲がっていると立たないもんだぞ！」

すると、道灌は……。

「屏風は曲がってるから立つんだよ？父ちゃん！」

屏風を指差して言った。

「……………トイレ言ってくる ……」

道真は戻ってこなかった。

屏風事件から暫く経ったある日…。

「これをお前にやろう！いつもこの言葉を意識しろ！」

道真は「おごれる者久しからず」と、平家物語の一部を紙に書いて道灌に渡した。

すると道灌は即座に「おごらざる者もまた久しからず」と書き換えた。

「んだこの野郎！せっかく書いてやったのによう！」

道真はキレて、道灌を扇で何度も叩いた。

「だって…だってえゝ！」

「だってじゃない！喰らえ！」

「うぎゃー！」

道灌の叫び声は暫く続いた。

十二番槍 江戸城の築城主（後書き）

武蔵の国の戦国武将、太田道灌。

江戸城の築城主として有名（？）です。

彼は屁理屈が得意だったんでしょね！

父の道真に「障子は真っ直ぐだから立つ！曲がっていたら立たない！」と言われると、屏風を持ってきて、「屏風は曲がっているから立つんだ！」と言ったらしいです。

道真は何も言い返せなかったらしいですよ…。

また、「おごれる者久しからず」と書いて道灌に渡したところ、「おごらざる者もまた久しからず」と書き換えたらしいです。

意味は、「権力が無く調子に乗れない者もまた長くない」となるんでしょうか。

とにかく、彼は屁理屈が得意な頭が切れる戦国武将だったようです。

十三番槍 九州筆頭のキリシタン殿様（前書き）

九州のキリシタン大名と言えばあの人！

史実そのままがネタになる、最強の切り札的なお殿様です。

十三番槍 九州筆頭のキリシタン殿様

「何！？美女！？よし！すぐに呼べ！」

「えっ？し、しかし…。関東の女子おなごなのですが…」

「構わん！呼べ！」

「どうか…。旦那もいるのですが…」

「知るか！呼べ！これは命令だ！従わぬなら斬る！」

「し、承知！」

ここは九州、豊後の国。

大友館。

そして、この無類の女好きのお殿様はおおともそうりん大友宗麟。
九州のキリシタン大名の筆頭である。

今日も、女遊びを終えて城に帰った宗麟。

彼を待っていたのは、妻のなた奈多夫人だった。

「いつもいつもいつも知らない女と遊びやがって！もうこちらも黙ってはいませんわ！今日、国中の僧侶と山伏に、

あなたを呪い殺せと命令しました。今更反省しても遅すぎますわ！」

元々気の強かった奈多夫人。

ついに、宗麟の行いに耐えきれなくなった故の行動だった。

「ちょっ！嘘…。い、いやー！イエス様ー！お助けー！」

そう叫びながら宗麟は城を飛び出した。

そして宗麟失踪。

しかしその3日後、家臣が城の外れにあるあばら小屋で宗麟を発見した。

「ほら、殿！お城に帰りましょうよ！」

家臣が宗麟の腕を引っ張りながら言った。
当然呆れている家臣。

「嫌じゃ嫌じゃ！城には奈多がいるから嫌じゃ！」

ひたすら拒否する宗麟。

「…はあ…。じゃあ、臼杵城に行きますか…？ここにいても仕方ないですし…」

「うん…」

こうして、宗麟は拠点を移すことになった。

十三番槍 九州筆頭のキリシタン殿様（後書き）

大友宗麟は女癖の悪さが尋常ではなかったのですよ。

「美女」と聞いた瞬間、畿内や関東から呼び寄せまくったり。

一応言いますが、九州にですよ？

移動手段は馬や籠ですよ？

極めつけは、家臣の妻を奪い取ったり。

そんなだから、妻とは仲が極めて悪かったらしいです。

どのくらいかと言うと、祈祷僧や山伏なんか「夫を呪い殺せ」と命令するほど。

薙刀を使わなかっただけ拍手ですよ！

で、そんなことがあったから宗麟は拠点の大友館から失踪したんです。

呪い殺されちゃ堪ないよ。

暫くすると、宗麟は、あばら小屋で発見されました。

しかし、「あの館には奈多がいるから帰りたくない」と、大友館に帰ることを頑なに拒否。

仕方なく、宗麟の家臣が建てた、臼杵城に連れて行かれたのでした。

因みに、宗麟が臼杵城に拠点を移した表向きの理由は、「毛利水軍に対抗するため」でした。

実際は奈多さんから逃げたかっただけでしょうけどね。

まあ、確かに毛利水軍は強いけど…。

というか…。

宗麟って何なの！？

どこまで女好きだところなるの！？

このままだと宗麟ファンの方に怒られそうなので彼の名誉挽回の為に一つ良い面も。

日本で最初に大砲を導入したのは宗麟です。

国土をも崩す威力があると言う意味で、「国崩し」という名前でした。

一応、強かったんですよ？

大友軍。

頭首がアレなだけで…。

十四番槍 兄弟たるもの支え合え! (前書き)

今回は有名な逸話です。

というか…偽話…?
いっわ

あとがきがメインかも…。

十四番槍 兄弟たるもの支え合え！

「毛利両川完成！これで毛利家も安泰だ！」

こちらのお殿様は毛利元就。

毛利家安泰のために全力を注いだ、知略を駆使した戦国武将。

「おーい！隆元！元春！隆景！ちよつと来い！」

元就は、自分の3人の息子たちを呼び寄せた。

毛利隆元・吉川元春・小早川隆景の3人である。

元春は吉川家、隆景は小早川家の養子として後継ぎとなっている。

「いいか！この先お前たちは決して争ってはならん！いつでも兄弟として支え合い、協力するのだ！」

元就が息子たちに言った。

はいっ！と返事をした息子たち。

そして、元就は話を続けた。

「ここに一本矢がある。これはお前たち一人一人だ。だが…この矢は…簡単に…！ふんっ！あれ？ふんっ！」

バギッ！

元就は矢を折ってみせた。

「はあ、はあ…。か、簡単…に…折れ…折れてしまう…」

元就息切れ中。

5分後…。

「ふう…。もう大丈夫だ。話の途中だったな。一本の矢は折れやすい。だが…三本合わせると、頑丈になり折れなくなる！お前たちもこの矢のように3人合わさって協力していくのだ！」

「はいっ！（あれ？一本でも折れにくかった…？）」

3人同時に返事をした。

「でも、三本も矢使ったら三倍早く矢が尽きちゃう…」

「ああ？おい隆景、何か言ったか？」

「ひいゝ！な、何でもないです！」

元就の息子3人は決して争うようなことはしなかった。

十四番槍 兄弟たるもの支え合え！（後書き）

毛利元就の「三矢の訓」さんし おしえでした。

一本の矢は弱くもろいが、三本合わせると強い頑丈な矢になる。
っていうあれですね。

しかしですね、これ。

毛利家の史料のどこ探しても出て来ません。

早い話が作り話なんです。

イソップ童話や中国の故事に似たようなものが出ています。

多分、それが元ネタになってるんだと思います。

さらに、江戸時代に流行った朱子学。

これが教訓を作るのが得意だったらしいです。

で、日本で三矢の訓が当てはめられる丁度いい人が元就だった。

そんな感じでしょうかね？

簡単に言うと、「兄弟仲良くしなさいよ」と言うことを教訓とした
い。

そのために何か具体例が欲しい。

よし！三矢の訓だ！元就だ！

みたいな感じ。

まあ、結果として毛利・吉川・小早川は争いませんでしたし。

教訓にするには持ってこいだっただけでしょうね。

因みに、本文の最後の「三倍早く矢が尽きる」は「妖精大戦争」でのスターの台詞なんですが…。

恐らく、この小説を読んで頂いている独身者様の中に東方好きな方はいらっしやらないですよ…。

場違いなネタでした…。

一の太刀 もしもあの時…（前書き）

今回は特別番です。

もしも関ヶ原の戦いが長引いていたら…について考えて見ました。

興味無ければスルーの方向で…。

あくまで、私一人の考えです。

可能性の一つくらいに見てください。

ご意見いただけると嬉しいです。

一の太刀 もしもあの時…

もしも、関ヶ原の戦いが長引いたら…。

1600年関ヶ原。

史実では6時間ほどで決着が付いた天下分け目の戦い。

しかし、もしも小早川が裏切らなかったら…。

戦いは数カ月に及び、泥沼化していただろう。

泥沼化した状態から東軍が勝利したとしたら、家康は江戸に幕府を開いただろうか？

もし西軍が勝っていたら、首都は大阪だったのだろうか？

恐らくだが、どちらも正しくないだろう。

関ヶ原が泥沼化した。

小早川が裏切らずに西軍が勝利した。

どちらの状態でも東軍、西軍共にボロボロである。

実際、そうなることを予想して天下を狙った男もいた程だ。

黒田勘兵衛。

九州の天才軍師である。

関ヶ原が泥沼化すると読んだ彼は、大友軍に勝利し、兵力を強化していった。

史実では、関ヶ原がすぐに終わってしまい、家康に軍を解散させられたが…。

関ヶ原の戦いが長引いていれば、勘兵衛が天下を取っていたと思われる。

そうなったら、日本の首都は九州で、キリスト教も弾圧せず、鎖国もしなかっただろう。

大きく歴史は変わっていたかも知れない。

そんな意味でも、関ヶ原の戦いは「天下分け目の戦い」だったのである。

一の太刀 もしもあの時…（後書き）

歴史の「もしも」って難しいです…。
正解がないので…。

次回からまた普通に逸話書きます〜。

「もしもあの時」は逸話が思いつかなかったり気分が乗ったときに不定期で書いていききたいと思います。

興味無ければスルーしてくださいな。

ご意見頂きたく思います。

「いやいや、ここはこうじゃなくてこうなったんじゃないかね？」みたいな意見とか…。

待ってます〜。

因みに、回数のカウントは「〇の太刀」です。

十五番槍 蝮の娘様（前書き）

初の姫様が主役です。

戦国時代に活躍した女性って結構少ないので逸話探すのもひと苦労した記憶が…。

十五番槍 蝮の娘様

「…さあ、可愛い帰蝶よ…。旅立ちの時間じゃ。尾張の国で幸せになるんじゃない！」

美濃の国のお殿様、斎藤道三はそう言って娘の頭を撫でた。

「もう、お父様ったら！私は尾張の信長様の下で幸せになりますってば！」

道三の愛娘、帰蝶は道三にそう言った。

今、帰蝶は尾張の織田信長のもとに嫁ごうとしている。

そうになると、名は美濃から来た姫という意味の「濃姫」となる。

完全に斎藤家を出ることになるのだ。

「うう…。帰蝶よ…。儂からの嫁入り道具じゃ。受け取ってほしい…」

道三が手渡した物は…。

「…刀…ですか？尾張にも包丁くらいはありますよ？それに料理は侍女に作らせれば…」

「違う！帰蝶…。信長という男が噂通りのうつけならば、その刀で殺してしまうのじゃ！良いな？」

道三が言った。

それを聞いた帰蝶は、刀を道三に向けた。

「…ふふっ。でもこの刀、いずれお父様を斬るものになるかも知れませんわよ！」

「はははっ！それでこそこの蝮の娘じゃ！天晴れ！達者でな！濃姫よ！」

「はいっ！お父様！私、濃姫として幸せになります！」

帰蝶はゆつくりと美濃の地を後にした。

十五番槍 蝮の娘様（後書き）

濃姫が10歳頃の時のお話でした。

濃姫（帰蝶）は信長に嫁ぐことになりました。

政略結婚だったと思います。

嫁いで行く濃姫に道三は刀を渡しました。

刀って言っても小さいやつですよ。

道三は「信長が本当に噂通りのうつけならその刀で斬り殺せ」と濃姫に言ったそうです。

すると濃姫は「この刀はお父様を斬ることになるかも知れません」と言ったそうです。

10歳の女子が言うことじゃないよ！

その若さで世の中の動きを既に見抜いていたのでしょうか…？

とにかく、凄い女性だったんですよ、濃姫は。

賢かったんですね。

これを聞いた道三は、濃姫を誉めたらしいですよ。

「流石は蝮の娘！」って。

心が広いというか何というか…。

因みに、濃姫の名前が「帰蝶」なのは、有力な説であって確定ではなかったと思います。

二の太刀 〱戦国逸話小ネタ集〱（前書き）

小説としては使いにくい逸話を集めて見ました。

第一回目は豊臣秀吉です。

ほぼ箇条書きですけど、せっかくの逸話なので…。

二の太刀　　〳戦国逸話小ネタ集〵

豊臣秀吉

秀吉とおねの結婚は戦国時代にしては珍しく、恋愛結婚だった。因みに、親には反対されたそうです。

秀吉の右手には指が六本あった。

ルイス・フロイスや前田利家がそう書いてます。

肖像画の髭は付け髭だった。

当時は髭が無いのはとても恥ずかしいことだった。

喧嘩で「この髭無しがっ！」と言われた北条の家臣が相手を斬り殺した記録もあります。

ニックネームは「猿」ではなく「禿鼠」だったらしい。

「猿」は信長がおねに宛てた手紙の中に「あの猿は元気か？」みたいなことが書かれているくらい。

二の太刀 〱戦国逸話小ネタ集〱（後書き）

小ネタでした。

解説は特にありません。
本文通りです。

200文字埋めるのに苦労しました…。

十六番槍 三顧の例に応えた軍師（前書き）

週刊ランキングの歴史部門で9位でした！
週刊に入ったのは初めてです。
有難う御座います！

さて、今回はあの軍師！
城の乗っ取りと言えば？

十六番槍 三顧の例に応えた軍師

「おいこら義龍！貴様息子の癖して父に刃向かうとは何事だ！親の顔が見てみたいわ！」

「んだとオラア！テメエのようなクソジジイ、父親だと思ったこともないわ！親の顔が見たけりゃ、鏡見な！」

ここは美濃。

斎藤道三が息子の義龍と争っていた。

国が荒れているそんな中、母や弟と菩提山城で父の帰りを待っている少年がいた。

色白で女性らしさもどこかに存在する彼の名は、竹中半兵衛。

彼の父、重元^{しげちか}は、道三の味方として出陣していた。

子供と女しかない城は、義龍側から見ればこれ以上無い獲物だった。

「おいっ！今なら菩提山城は女子供しかないらしい！城一つ落としたとなれば、義龍様から謝礼がたんまり出るぞ！」

「マジで？チャンスじゃん！よーし！やってやんよ！」

案の定、義龍の味方の土豪たちが攻撃してきた。

「へーい！竹中のガキ共！殺されたくないや、城空けな！テメエらの親父も兵も出陣してんのは知ってんだ！足掻くだけ無駄だ！」

攻撃しながら土豪は叫んだ。

その声に怯えたのは城内の半兵衛の弟や母。

「あわわわわ…。は、半兵衛や。し、城を…城を空けないと…」

「そうだよ兄様！今は俺達3人しかないし…。殺されたら元も子も無いよ！」

母と弟は半兵衛に泣きついた。

しかし、半兵衛はいたって冷静だった。

「ふう…。母上様、そして弟よ…。城中の竹を集めてくれ…」

そういうと、半兵衛は焚き火をおこした。

「竹をこの火に投げ入れて！急いで！」

半兵衛が指示した。

ポカンとする二人。

それでも半兵衛に従うしかなかった。

「そりゃ！んしょ！兄様！入れたよ！」

「もっと！もっと入れて！」

パンッ！パンッ！

火にくべられた竹は勢いよく破裂した。
勿論、大きな音を伴って。

その音を聞いてビビったのは土豪たちであった。

「うわぁ！こ、この音……。鉄砲じゃねえか？」

「あ、ああ……。間違いねえ……。て、鉄砲だぁ！まだ城にそんなものが残ってたのかっ！」

「うわぁ！撤退！撤退じゃあ！」

土豪は慌てて撤退した。

こうして、半兵衛たちは事なきを得た。

十六番槍 三顧の例に応えた軍師（後書き）

竹中半兵衛が13歳の時でした。

10歳の弟や母と城の留守を守っていると土豪に襲われました。

しかし、半兵衛は全く動じず、火に竹を入れるように指示。

竹の破裂音を鉄砲の音と勘違いした土豪は慌てて逃げ出したそうです。

後に天才軍師と呼ばれる半兵衛の才能が早くも開花したエピソードでした。

十七番槍 東北の独眼竜3（前書き）

今回もあの方を特集します。

いやあ、ネタが入って来ないときの独眼竜！

十七番槍 東北の独眼竜3

よく晴れた昼下がり。

暖かな陽気が気持ち良い休日。

昼寝がしたくなるのは、お殿様も同じのようで…。

「ふああゝ…。一眠りするかな…」

ここ奥州のお殿様、伊達政宗もお昼寝中。

暫くすると、天気が崩れて雨が降ってきた。

それに気付いた政宗の家臣。

「ああ！雨だ！政宗様がお風邪を引いたら大変だ！」

気を利かせて政宗を起こした。

「政宗様！雨です。お体が冷えてしまいますよ。暖かい場所にお布団を敷き直しますね」

すると政宗は起き上がった。

その手には日本刀が…！

それを見た家臣は一目散に逃げ出した。

「うああー！ま、政宗様！？」

「待て！おい待て！」

追ってくる政宗。

ついに家臣は追い詰められてしまった。

「はあ…はあ…。人がわざわざ気を利かせて起こして差し上げたというのに…！私を殺すというのなら…！いっそ！」

家臣は刀に手を掛けた。

「はあ…はあ…。おい…。何で逃げるんだよ…。気を利かせてもらったから、お礼にこの刀をあげようと思ったのに…」

家臣の誤解は解けた。

十七番槍 東北の独眼竜3（後書き）

伊達政宗が昼寝をしていると、雨が降ってきました。

そこで、気を利かせた家臣が政宗を起こしました。

すると、政宗は刀を手にか家臣を追いかけ始めました。

追い詰められた家臣は政宗と差し違える覚悟で、「何故追って来たのですか？」と聞いたそうです。

政宗は、「お前こそ褒美にこの刀をあげようと思ったのに何故逃げるんだ！」と言ったそうです。

そりゃ逃げるよ！

起こしただけで追いかけるのはゴメンですね…。

そして安定しないあとかきの書き方…。

十八番槍 天下のただ飯喰らい（前書き）

今回は「穀蔵院ひよつと齋（天下のただ飯喰らい）」と自ら名乗ったあの方！

私はこの方大好きです（笑）

十八番槍 天下のただ飯喰らい

「どうしてお前はいつもいつも人の話を聞かないんだ！いい加減にしろ！」

「…また怒られた…。ちえっ！つまんねーの！」

先ほどまで叱られていたこの男。

前田慶次。

この加賀の国を治める前田家の人間である。

その言動、行動、全てが変わっていることで加賀では有名だった。

そのことが原因で、加賀の殿の前田利家にはしょっちゅう怒られていた。

「つまんねー！どんなに広い土地があったって、自由に生きれなきゃそこの浪人と同じなのにな…。だったら…！」

慶次は前田家を出ることを決心した。

「いや、待てよ…。ただ家を出ても面白くないな…。最後くらいあのうるさい利家に仕返ししてやりたいな！」

慶次は密かに計画を立てた。

そして、ついに計画の実行日。

慶次郎は利家に手紙を書いた。

「今までの行動、申し訳ありませんでした。反省しますので、その印に茶会をします。是非来てください」

それを見た利家は喜んだ。

「おい！慶次が改心したぞ！これは茶会に行かなければ！松風を出せ！」

利家は、愛馬「松風」に乗り、慶次のもとへ。

「よく来ましたね！本日はとても寒いので、茶会の前にお風呂を用意しました」

慶次が利家に言った。

「気が利くな！それでこそ前田の男！」

利家は風呂に飛び込んだ。

しかし…。

「ギャー！うわっ！あー！み、水風呂じゃないか！あの野郎！絶対

に慶次を逃がすな！」

利家は水風呂が沸くかと思うくらい怒った。

しかし、その怒りの矛先は、既に城からは逃げ去っていた。

松風と共に…。

十八番槍 天下のただ飯喰らい（後書き）

前田慶次でした。

前田慶次郎ともいうらしいですね。

前書き&題名の「穀藏院ひよつと斎（天下のただ飯喰らい）」は、慶次が秀吉に面会した時に名乗った名前（？）だそうです。

今回は慶次の悪戯についての逸話でした。

「茶会を開く」と言って利家呼び出した慶次。

それを「心を入れ替えた」と喜んだ利家でした。

しかし、全ては慶次の思惑通り。

「寒いのでお風呂を沸かしました」と利家を風呂に入れました。

しかし、その風呂は水風呂でした。

勿論、利家はブチギレたそうです。

因みにこの時慶次58歳。

もういい歳ですよ。

悪戯小僧ほど恐ろしいものは無いね…。

こうして、慶次は利家に一泡吹かせることに成功したのです。

利家の愛馬の松風は慶次に盗まれたそうです。

この度胸に拍手ですよ…。

十九番槍 四国の姫若子（前書き）

ここに来てやっと1万文字超えです（笑）

最近、登場する武将のキャラが弱い気がする…。

あとがきで解説するので、ある程度は崩しても大丈夫でしょうか？

さて、今回の舞台は四国です！

サブタイトルの姫若子は「ひめわこ」と読みます。

十九番槍 四国の姫若子

「元親よ！今度の長浜の戦い、お前も出よ！」

長宗我部国親ちようそかくにちかから息子の元親に命令が下った。

「えゝ？俺？読書してたい…。第一、戦なんてやったことないし…」

元親が言った。

「22歳で未だに戦に出たことないのなんて、お前くらいだ！そんなだから姫若子ひめわこなどと呼ばれるんだ！いいから来い！さもなくば、家督はお前に譲らん！」

「えゝ…」

元親が出陣することは、直ぐに家臣たちにも伝わった。

「姫若子が出んの？」

「マジで？うわゝ。絶対役に立たねーよ！」

色が白く、読書ばかりして大人しかった元親。

全く期待されていなかった。

いざ、決戦日。

戦いは、土佐の長浜城で行われた。

出陣の前に、元親は家臣を呼んで幾つか質問した。

「ねえねえ！槍ってどう使うの？」

その質問に言葉無くした家臣。
ただただ飽きれるしかなかった。

「……。じゃあ、相手の目を狙ってください。それだけでいいですよ……」

「分かった！もう一つ聞く！大将は先に行くものの？それとも後から行くの？」

「……はあ……。大将は大切なお人。先に行ってはいけません……」

「分かった！じゃ、戦に行ってくる！」

戦が始まった。

元親は最前線にいた。

「おら！おら！おら！かかって来いや雑魚が！」

元親は強かった。

戦が終わると、敵の首を2つ持って帰ってきた。

そこで、家臣がきいてみた。

「何で？ 何で強いのを隠していたんですか！？」

「あははは！ 戦は騙し合いよ！ 敵を騙すにはまず味方からってね！」

姫若子が、鬼に化けた瞬間だった。

十九番槍 四国の姫若子（後書き）

長宗我部元親の初陣は遅く、22歳と言われています。

夜襲で長宗我部国親に奪われた長浜城を取り返しにきたもとやましげとき本山茂辰との戦いでした。

長浜の戦いといえます。

この時に元親が被った兜が現存します。

元親は色が白く、本ばかり読んでいて大人しかったため「姫若子」と呼ばれていました。

初陣の時には、槍の使い方や大将の振る舞い方を聞いて、家臣をガツカリさせました。

しかし、いざ戦が始まると、最前線で奮闘し、数人の敵を倒したそうです。

これで長宗我部軍の士気はマックスに！

結果圧勝しました。

姫若子がやりよった！

家臣に色々聞いたのは、本で読んだ知識を確かめたかったかららしいです。

元親が何も知らないバカを演じたのは、騙すため。

敵も味方も騙しました。

「何故今まで大将の器を隠してたのさ？」と家臣に聞かれると、「戦とは騙し合いである！」と答えたいらしいです。

因みに元親のこの言葉は孫子の兵法書の言葉らしいですよ。

いかにも本好きの元親らしい！

やっぱり知識がある人は強いのかね…。
いつの時代も。

以上！元親でした！

どこか分かりにくい場所があったら遠慮無く言ってくださいね…？

史実を崩して書くのって地味に難しいので、何か分かりにくい部分があるかも…。

三の太刀 日の本のお姫様（前書き）

前回のを予約投稿にし忘れた関係で、次の日分のストックが無くなり、急遽書いたものです。

「〇の太刀」シリーズ第三回目です。

このシリーズは、本編では扱いきれないようなネタを紹介します。

小説っぽさは0です。

興味無ければスルーで…。

今回は戦国時代を生きた女性に注目しました。

三の太刀 日本のお姫様

戦国時代。

それは、男たちが夢をぶつけ合ったまさに男のための時代である。

そんな時代に、男たちを支えた姫様もいたのである。

おね

恋愛結婚で、両親には反対されながらも秀吉と結婚した。

以後、秀吉が天下を取り、自身が83歳で永眠するまで生涯秀吉のために生きた女性。

しかし、結婚したてのおねは、秀吉にある約束を守らせていた。

「もし秀吉が尾根に口答えしたら一昼夜縛り上げて良い」

秀吉は、尻に敷かれていた…。

おおほうりつるひめ
大祝鶴姫

大内義隆との戦いで出陣した少女。

しかし、この戦いで兄と恋人が討ち死に。

鶴姫は最後の反撃をして大内軍を撃破した。

しかし、その後兄と恋人を失った悲しみに耐えられずに18歳で海に身を…。

「わが恋は 三島の浦の うつせ貝 むなしくなりて 名をぞわづらふ…」

細川ガラシャ

細川忠興の妻。

父親が明智光秀で、本能寺の変が起きて人生が変わり果ててしまった。

忠興に幽閉されながらも、キリスト教だけを心の支えに生きた。

関ヶ原の戦いで、三成に人質として捕まりそうになったとき、細川家の為に死ぬことを決意。

キリスト教では自殺が禁じられているので、家臣に討たれる形で最期を迎えた。

戦国時代は、女性たちが影で活躍した時代でもあった。

三の太刀 日本のお姫様（後書き）

おね。

または北政所。

天下人、豊臣秀吉を支えた女性でした。

生涯子宝に恵まれなかったらしいです。

ただ、一説によると、妊娠はしたが秀吉が「時期でない」みたいな理由をつけてお灸を添えて流産させてたとか。

それが原因で子宝に恵まれなかったみたいなお説を聞いたことがあります。

逆に、前田利家の妻のまつは11人子供がいて、多いことで有名です。

1人目産んだの14歳だし…。

因みに結婚したのは12歳。

利家は24歳でした。

今では考えられないです…。

大祝鶴姫。

戦った女性。

16歳ですでに出陣してたんでしたっけ。

いまいち情報が少なくてすいません…。

因みに、鶴姫の甲冑は現存する唯一の女性用の甲冑です。

胸の辺りが膨らんでいて、お腹の辺りが細くなってるらしいです。

スタイル良かったのかな…？

細川ガラシャ。

キリスト教に生きた女性。

様々な不幸にも負けずに頑張った女性ですね。

辞世の句は「散りぬべき 時知りてこそ 世の中の 花も花なれ
人も人なれ」

散る時を知っているからこと花は美しい。私もそうありたい。

夫の忠興についてはまた別の機会に紹介します。

すごーいから！

以上！急遽書いた三の太刀でした。

本当は今頃この小説の代わりに長宗我部のお話が投稿される予定だったのに…。

今日投稿するぶんの小説が無くなっちゃったから…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5665x/>

日の本のお殿様

2011年11月2日01時06分発行